

ひよんなことで日々が新しくかわった。理科系畑を歩んできた私に、小説執筆の日々が訪れようとは夢にも思わなかった。いつも目の前には科学の道という正面ドアがあって、それは当然のこととして受けとめていたが、しかし、ある思いがわきあがったそのとき、正面ドアの横っちょに新しいドアがあらわれたのだ。そのある思いとは特別なことではなかった。あれは私が三十歳半ばのことである。病院にかけつけて、うまれたばかりの長男を腕にだいたときに、その思いがわきあがってきたのだ。これからは男の子がのびのび育つのがむつかしい時代になるぞ。男の子たちにエールをおくる話を書かないと……。横っちょドアを、わたしはこんこんとノックした。そんなある思いに背なかを押されて、書いた処女作がデビュー作となり、わたしが知らなかったもうひとつの人生が回りはじめたのです。その後、純文学から児童文学にうつって、創作活動を続けることになりました。

あなたにとってのある思いが、胸にわきあがったならば、それは横っちょドアがあらわれるタイミングです。あなたの思いをとめないでください。ノックしてください。すばらしき文学の世界へようこそ！